

専門職だけでは……

白井正夫 元朝日新聞編集委員

昼食のカレーライスを食べながら窓に目をやると、庭の芝生が霧雨に濡れていた。うっとしい季節なのに、いつの間にか胸が軽くなった気がした。「ケアセンター成瀬」の食堂でおしゃべりしながら昼食を共にしている40人ほどの参加者も、同じ気持ちではないか、と思った。

梅雨もようの日曜日、東京都町田市で開かれた日本福祉文化学会（一番ヶ瀬康子会長）の第15回現場セミナーに参加した。今回の現場は「私たちの街にケアセンターをつくらう」という住民運動から誕生したことで知られる社会福祉法人・創和会のケアセンター成瀬である。

多彩な顔で動く ケアセンター成瀬

1996年春に開所した「成瀬」はデイサービス、入浴サービス（町田市の委託事業）を中心事業として、これをサポートする「ケアセンター成瀬支援住民の会」（2157人参加）の活動から成り立っている。住民の会では約300人がボランティア活動をしており、食事サービスでは施設内レストラン、ティールームの調理、運営をしている。さらに、ここで介護活動を積んだ主婦たちが「アップル・ホームヘルプサービス」を立ち上げて、地域に出ていってミニデイや制度にとらわれないヘルパー派遣を展開するなど、幅広く、柔軟な在宅支援活動を展開し

ている。

その活動は新聞、テレビでたびたび報道され、また本誌7月号の特集「NPOが住民参加を超えるとき」でもレポートが寄せられている。だから私なりに理解しているのだが、セミナー参加には理由があった。住民運動から「成瀬」を誕生させた創和会理事長の西嶋公子さん（医師）がよく話す「高齢社会のケアは福祉の専門家だけでは成り立たない」を現場で確かめたかったからだ。

セミナーやシンポということと肩書ある人が並ぶのが普通だが、今日は違った。「成瀬」で働く10人が活動報告をしたが、西嶋さんと施設長の専門スタッフに交じって送迎運転手さん、調理場で働く主婦、施設の案内係さんまでが登場した。この顔ぶれを見ただけでも「高齢者ケアが専門家だけでは成り立たない」ことがよくわかる。

「成瀬」の活動は大きく分けると、市の委託事業を行う部分と、住民の会の活動部分がある。もちろん2つの活動は一体となっているので、強いて分ければである。前者が社会福祉士、理学療法士、ホームヘルパーなど専門家が必要とする活動分野であり、後者はいろいろな資格を必要としない活動分野である。あえて分けたのは、西嶋さんの「安心して暮らせる街づくり」の報告の中で、なるほどと思う話があったからだ。抜粋すると、

「施設が施設として、ケアワーカーが

ケアワーカーとして動いているだけでは不十分です。私たちが地域を大切に思うなら、日常の活動の中で向上を求めているといかないといけない」「住民の会は絶えず2つの課題を考えてきました。資格をもたない人が（福祉の現場で）何をできるだろうか。そして、自分ならどういうケアを受けたいかです。」

2つの話は「成瀬」の活動理念の根幹にもふれている。例えば、福祉介護職がその専門分野に安住してはいけなし、志の高さと専門性を高めれば次のステップが開ける、と呼びかけている。また、ボランティアが自らに与えた課題からは、福祉の専門知識や諸資格はなくても利用者の気持ちに添う活動が生まれる。10人の報告を聞いてみると、それが納得できるのだ。

次のステップ生む 志の高さ

主婦、高綱美智子さんは開所時からレストランの調理を担当する厨房ボランティアだ。有償ボランティア（1時間300円）の80人が三交代制で、ショートステイ利用者の朝食からデイ利用者の昼食、職員の分まで一日100食近くつくる。これだけの賄いだと少数のプロ調理師の方が効率的だが、「地域」のこだわりでがんばってきた。献立表のおやつがゼリーでも、急に寒くなった日ならお汁粉に切り替える。寒い日に冷たいゼリーより温かいものをという家庭感覚は、主婦だからこそ施設に持ち込める。高綱さんは「食事サービスは成瀬のケアを支える重要な要素ですから」と自信に満ちて報告した。

柳田正子さんは父の介護経験から地域づくりに関心を持ち、住民の会会員となった。開所時からヘルパー講習を受けて非常勤職員となり、デイサービスのリーダーからトイレ掃除まで「成瀬」の活動をしてきた。この間、ヘルパー2級研修も修了した。せっかく培った介護専門職の経験をもっと地域で生かそうと、西嶋さんから後押しされて、昨年、仲間と「アップル・ホームヘルプサービス」をつくった。

公的な介護サービスの枠にとらわれないヘルパー派遣（有料）をする「アップ

ル」の利用者は初め1人だけだったが、5月には7人と増えた。活動ヘルパーは9人。3年前まで専業主婦だった柳田さんはいま、週に2日は非常勤職員として勤め、4日をヘルパー活動に当てている。「家に閉じこもらざるを得ないお年寄りに、世間の風の運び手のつもりで活動しています」。柳田さんは気負いなく、活動報告を結んだ。

送迎に始まり、送迎で終わるデイサービス。この道まだ4年の運転手の鈴木信夫さんは、迎えに行っても乗らない人、送っていても降りない人をその気にさせる「ハート」を語った。また、見学者を案内する施設ガイドの主婦、永尾陽子さんは「なぜ、こんなにボランティアが多いのか」という質問が一番多いと紹介して、「何か楽しいことがあると思うからやっている」とボランティアの極意を明かした。専門家でもない人が、福祉現場でそれぞれの役割を担っている。

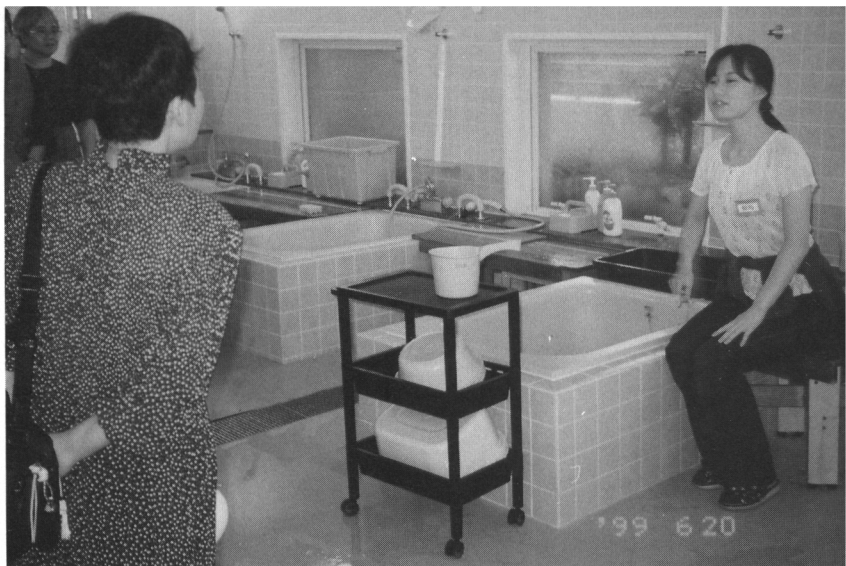
福祉施設ではマニュアル化している浴室設備と違った設備で、障害者が普通の風呂に入れる入浴サービスの報告も興味深かった。

浴室には機械浴槽が1つ、家庭にあるような一人浴槽が3つある。半埋め込みの一人浴槽の横に同じ高さの腰掛けがあり、これがポイント。車いすで浴室内にきた人も残った機能と介助でここに腰掛けて足を浴槽に移せば、普通の風呂に入れるのだ。従来の施設の一般浴はスロープを歩くか2、3段降りないと入れず、脚力のない人は機械浴に回される。「成瀬」では介護のプロの提案から従来型を返上し、ほとんどの人が家庭風呂を楽しんでいる。

「成瀬」の報告を聞いて見えてくるのは、「専門職の能力+住民の手厚い参加」で築く地域ケアの姿だ。両者が融合するほどの活動に、「専門家だけでは……」という西嶋さんの主張がよく理解できた。

■ 介護の質左右する ■ 養成短縮の動き

といっても、高齢者ケアはやはり専門職の能力、質の高さが前提になるだろう。ここで気になるのは、最近、経



浴槽と同じ高さのいすを用意。体が不自由な人もここに座れば風呂に入り易い、と説明する職員（ケアセンター成瀬で）。

済団体連合会が提言したホームヘルパー3級課程の研修時間を大幅に短縮したり、介護福祉士や理学療法士、作業療法士の修業年限の短縮を求める動きである。「福祉専門職の質」にかかわる問題だけに注目したい。

経団連は5月中旬に発表した産業再生の提言の中で雇用対策として「ヘルパー3級の研修時間(50時間)を簡素化して資格を取りやすくして、数を増やすべきだ」と提唱した。自民党も雇用創出の規制緩和策として短縮を検討しており、30時間程度にするという数字まで出ているという。

短縮の動きに日本介護福祉士会、全国ホームヘルパー協議会、全国老人クラブ連合会などが「介護の質を落とす」と反対を表明した。厚生省も6月、衆院厚生委員会で「研修時間は(現状でも)最低時間と考えている」と短縮の考えはないことを明らかにした。一件落着の様式だが、介護保険実施をにらんだ政治がらみの話になると何が起きてもおかしくない状況だから、頭に置いておいた方がよさそうだ。

ヘルパー養成研修は1級230時間、2級130時間、3級50時間が義務づけられている。研修修了者は今年度末には50万人に達すると見込みだが、就労者は約17万人。来年からの介護保険ではヘルパーは原則2級以上と言われているが、人材確保が難しい市町村も多く、現状では3級を認めざるを得ない方向

だ。経団連の提言も、介護保険導入をにらみ、3級研修を簡素化して労働力の大幅増加をねらったものだ。

短縮の動きに福祉団体が一齐に反発するのは「現在の50時間は基礎知識だけで、これでも研修は足りない。これ以上の短縮は介護の質低下につながり、お年寄りが一番困る」という声に集約できる。訪問介護サービスは一对一の仕事で、ヘルパーの質でサービスの質も決まるだけに、十分な研修時間は必要だと思う。

「介護の質」となるととなく抽象的な説明になりがちだが、朝日新聞(99年5月28日付け「養成短縮、異議あり」)に掲載された日本介護福祉士会の田中雅子会長の次の話がわかりやすい。「おむつを替えるにしても、ただ替えればいいのではない。尊厳を損なわないように、どうやったらおむつをつけなくてよくなるかなどを考えて行う。倫理、人間観も含めた技術が必要」。介護の現場30年という田中さんの言葉に、多くの人がうなずけるのではないか。

おむつ替えも単なるテクニックではなく、ハートの技の部分があると知った。簡単養成ならテクニックだけで、ハートの部分が削り落とされるのは明らかだ。2級ヘルパーとは大違いといわれても、現場に立てば3級も立派な専門職と思う。質の向上は求め、求められて当然である。